

平成 26 年 7 月 23 日

長岡市教育委員会（定例会）会議録

長岡市教育委員会



1 日 時 平成 26 年 7 月 23 日 (水曜日)  
午後 2 時から午後 3 時 55 分まで

2 場 所 宮本小学校

3 出席委員

委員長 大橋 岑生      委 員 羽賀 友信      委 員 中村 美和  
委 員 青柳 由美子      教育長 加藤 孝博

4 職務のため出席した者

教育部長	佐藤 伸吉	子育て支援部長	若月 和浩
教育総務課長	武樋 正隆	教育施設課長	中村 仁
学務課長	田村 均	学校教育課長	竹内 正浩
子ども家庭課長	波多 文子	保育課長	栗林 洋子
中央公民館長	佐藤 実	中央図書館長	金垣 孝二
科学博物館長	小熊 博史	学校教育課主幹兼管理指導主事	笠原 徹
学校教育課主幹兼管理指導主事	山之内方史	学校教育課主幹兼管理指導主事	宮 宏之

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐	茂田井裕子	教育総務課庶務係長	水内 智憲
教育総務課庶務係	高杉 雄二	学校教育課長補佐	川上 英樹

## 6 議事日程

日程	議案番号	案 件
1		会議録署名委員について
2	第 32 号	条例改正の申し出について（長岡市学校給食共同調理場条例の一部改正）
3	第 33 号	平成 27 年度使用教科用図書採択について

## 7 会議の経過

（大橋委員長） これより教育委員会 7 月定例会を開会する。

---

### 日程第 1 会議録署名委員について

（大橋委員長） 日程第 1 会議録署名委員の指名を行う。会議録署名委員については、会議規則第 44 条第 2 項の規定により、羽賀委員及び青柳委員を指名する。

---

### 日程第 2 議案第 32 号 条例改正の申し出について（長岡市学校給食共同調理場条例の一部改正）

（大橋委員長） 日程第 2 議案第 32 号 条例改正の申し出について（長岡市学校給食共同調理場条例の一部改正）を議題とする。事務局の説明を求める。

（田村学務課長） 改正する条例は、長岡市学校給食共同調理場条例で、9 月の市議会に申し出たいものである。改正理由と内容は、長岡市川口学校給食共同調理場の移転改築に伴い住所を変更するものと、長岡市立西谷小学校を栃尾南小学校に統合することに伴い、長岡市西谷学校給食共同調理場を廃止し、長岡市栃尾南学校給食共同調理場を新たに設置するものである。管轄する学校も西谷小学校から栃尾南小学校に変更するものである。施行期日については、長岡市川口学校給食共同調理場の移転改築に伴う改正は、平成 27 年 1 月 1 日から、長岡市西谷学校給食共同調理場の廃止に伴う改正は、平成 27 年 4 月 1 日からの施行を予定している。

（大橋委員長） 質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 長岡市栃尾南学校給食共同調理場とは、現在ある栃尾南小学校の学校給食調理場とは違うのか。

(田村学務課長) 栃尾南小学校の給食調理場を用いて中野俣小学校の給食を共同調理するもので、新たに共同調理場として位置づけるものである。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) ないようなので、これより採決に移る。本件は、原案のとおり決定することに異議ないか。

[「異議なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 異議なしと認める。よって、本件は原案のとおり決定した。

(加藤教育長) 確認事項がある。県内で学校給食費に関する不祥事が相次いたが、長岡市としてどのような対応をとるのか、あるいはとったのか伺いたい。

(田村学務課長) 長岡市の給食会計に伴うシステムについて、某市の事件を受け、先月 24 日に確認を実施した。某市では発注から支払いまで全て同一人物が担当していたと県から事件経過の説明を受けた。長岡市の場合はどうかと改めて現場を確認したところ、発注から支払いに至るまで複数人のチェックが入ることを確認している。その上で 7 月 16 日に新潟県教育委員会が県下市町村の教育委員会を招集し、緊急会議を行った。長岡市としては、本日午後 4 時から長岡市の全 88 校の学校長と事務担当者を集めての緊急会議をさいわいプラザで行う。長岡市としては改めて各学校長、事務担当者から今一度自分たちの足もとを再確認してもらい、信頼できる給食体制ができるよう、配慮をお願いする予定である。

---

日程第 3 議案第 33 号 平成 27 年度使用教科用図書の採択について

(大橋委員長) 日程第 3 議案第 33 号 平成 27 年度使用教科用図書の採択についてを議題とする。この内容については公表前であるので、秘密会が適当ではないかと思うが、他の委員の方々はいかがか。

[「異議なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) それでは、秘密会とする。

(大橋委員長) 本日の日程は以上で終了する。次に協議報告事項に入る。報告事項として、平成 26 年度第 1 回長岡市熱中！感動！夢づくり教育推進会議報告について、事務局の説明を求める。

(竹内学校教育課長) 平成 26 年 7 月 14 日にさいわいプラザ 6 階で開催した。委員 10 名のうち 1 名が欠席のため委員 9 名と、関係各課・事務局から 27 名が出席し、計 36 名が参加した。会議の内容として、1 つ目は平成 26 年度熱中！感動！夢づくり教育事業の概要について、全 69 事業の中からピックアップし関係課長が説明をした。2 つ目は次の 10 年の熱中！感動！夢づくり教育事業の構成について、4 月の定例会で承認された「熱中！感動！夢づくり教育事業次の 10 年のあり方」に基づいて、今年 9 月までに事業構成の諸案を作成し委員の方にご覧いただく予定である。また、9 月、10 月に推進会議を開催し委員の方から意見を頂きながら 27 年度以降の事業構成を考え、予算内に収まるよう計画を進めていくと説明した。平成 26 年度の熱中！感動！夢づくり教育事業の概要と、各課が説明した内容についての確認と意見をいただいた。主な意見として、「教育サポート錬成塾は向上意欲の高い者が対象であるが、例えばコミュニケーション能力が不足していると思われる教員を対象に人間性を高める研修などを実施できないか。」「児童数の減少に伴い、無理なメンバーの集め方を行っているスポーツ少年団(クラブ)が見受けられるので、少年団等に子どもへの適切な指導のあり方を専門家が指導する仕組みがあると良い。」というようなご意見をいただいた。これらについては、今後の事業の中でも検討していく必要があると考えている。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 「若い教員の事業認識が薄く、日々の多忙感の中で事業の良さが埋もれてしまうことなどがある」という意見に対し、どうしたら良いか意見は出たのか。

(竹内学校教育課長) 事業の戦略的な広報が必要であることと、管理職や新任教員への研修等を行い、この事業の取組を学校職員に周知する必要があることがわかったため、それを実現できるよう検討する。

(大橋委員長) 企画する側や推進する側は勉強の機会があるので、関わりについて学

ぼうとする気持ちがあるが、これは教育委員会の仕事だと捉え自分には関係がないと認識している教職員がいるために、このような意見が出るのではないか。管理職への研修指導はもちろん、それ以外にも何か手立てを打ち、学校と密接に連絡をとることも大事なことだと思う。

(佐藤教育部長) 夢づくり教育については、昨年度も教育委員会の中でもなかなか浸透していないのではないかとのご意見をいただいていた。毎年4月に教育委員会の様々なことを伝達する校長会議を開いており、今年は4月14日に開催した。その校長会議後、長岡市に編入してきた校長と新任の校長に熱中！感動！夢づくり教育について、始めたきっかけや事業内容など主旨を説明した。感想を聞くと教育委員会の考え方については素晴らしく感じ、特に裁量予算については、ぜひ活用させてほしいとご意見をいただき、いくつかの学校が新規あるいは数年ぶりに夢企画に応募してきた。まずは管理職に認識してもらうことが大事なので、今後も周知に努めたい。今回の取組については反響が大きかったため、必要性を感じた。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(笠原管理指導主事) 教育センターでも夢づくり教育について講座を持ち、夢づくり教育の内容を周知することに努めている。

(大橋委員長) 大切なことだと思うので、これからも継続してほしい。そのほか質疑、意見はないか。

(加藤教育長) 「主な意見」に対する、具体的な取組や対応策を伺いたい。

(竹内学校教育課長) 「安全安心なまちづくりに子どもたちが貢献できる工夫があると良い。」という意見に対しては、現在、熱中！感動！夢づくり教育以外にもセーフティパトロール等を活用するなどの事業を行っているが、PR不足や説明不足な部分があり、今後の事業についてよりしっかりと発信することで周知を図りたいと考えている。「コミュニケーション能力が不足していると思われる教員を対象に人間性を高める研修などを実施できないか。」という意見に対しては、教員サポート錬成塾は向上意欲のある者をさらに引き上げる目的で行っており、それ以外に管理職からその教員に対し、地域の方とのコミュニケーションをしっかりとるよう指導をしてもらっている現状について説明した。「子どもが存分に遊べる環境づくりが必要である。また、自己肯定感を育むためには、幼児期からの丁寧な関わりが不可欠である。」という意

見に対しては、幼児期から家庭教育講座等を開催しているが、その周知が不足しているため、より丁寧な広報に努めたいと考えている。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(中村委員) 「児童数の減少に伴い、無理なメンバーの集め方を行っているスポーツ少年団(クラブ)が見受けられるので、少年団等に子どもへの適切な指導のあり方を専門家が指導する仕組みがあると良い。」とあるが、この「子ども」とはどの子どもを指すのか。

(竹内学校教育課長) スポーツ少年団に属している小学校中学年の子どもを指している。子ども同士の無理な勧誘ではなく、スポーツクラブの団体指導者に対する専門家からの適切な指導を意味している。

(加藤教育長) これについてスポーツ少年団関係団体に申し入れて、指導するよう依頼済みであるなど、意見に対してどのように答弁したのか、はっきりした経過情報を報告してほしい。

(大橋委員長) ぜひそういった報告をお願いしたい。意見があったという報告だけではなく、それに対して事務局としての対応や対策を述べていただきたい。

(羽賀委員) 会議の場では、いただいた意見を尊重して今後に生かしていくと答弁した。会議から短い期間ではあるが、現段階でどの程度まとまっているのか報告をいただければ具体性が見えて良いと思う。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(青柳委員) 「若い教員の事業認識が薄く、日々の多忙感の中で事業の良さが埋もれてしまうことなどがある。」とあるが、これは熱中体験を取り入れない教員という意味なのか、それとも日々の多忙感の中で生徒を選抜して指導しなければいけないことへ嫌悪感をいただいているという意味なのか。

(竹内学校教育課長) 毎年全事業の内容を各学校に送り、その中から各学校に応じた事業を選択して取り組んでもらっているが、日々の多忙感により同じ事業ばかりを選択して新たな事業に取り組む姿勢が見られない傾向がある。若い教員の熱中！感動！夢づくり教育の各事業の内容や効果、主旨の認識が低いためだと思われる。管理職に全事業の周知を図り、各学校の状況に応じた事業を選択し活用してもらおうよう今後進めていきたい。



(青柳委員) ぜひ理解を深めていただきたい。せっかくの良い事業なので、それが重荷にならないよう、今後周知に努めてもらいたい。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(加藤教育長) 教育センターで行われる一般教員に対しての説明会は、いつ実施されるのか。

(竹内学校教育課長) 4月に実施した。また希望研修を2回実施しており、1回目は新任職員・転入職員を対象とした職員向け研修、2回目は管理職を対象とした夢企画のつくり方について行った。

(大橋委員長) 1回あたりの参加者はどのくらいか。

(竹内学校教育課長) いずれも60名以上が参加している。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に、平成26年度「ながおかハイスクールガイダンス」の開催について、事務局の説明を求める。

(竹内学校教育課長) 開催主旨としては、長岡市内及び近隣の高等学校や高等専門学校等が一堂に会する場で、中学生や保護者が、高校生に直接、学校生活について聞いたり、先生から教育方針の説明を受けることで進路選択の一助とするものである。また、一般市民にもお知らせし、各校の特色ある教育を広く市民にも知ってもらう機会とするものである。昨年度第1回を開催し大変好評であったため、今年度は県から「県立専門高校メッセ」を同時開催したい申し出があった。それを受け、8月6日にアオーレ長岡を会場に午前の部は10時から、午後の部は13時から同時開催する予定である。内容は学校紹介をアリーナ・ナカドマで行い、希望校によるチャリーディング、合唱発表等を交流ホールAで行う予定である。参加高等学校について長岡地区は昨年度参加校に長岡聾学校を加えた計20校、その他の地区は県立専門高校メッセの方から、農業科、工業科、商業科等の専門学科を有する県内高等学校が計25校の総計45校に参加していただく。現時点での参加予定中学生・保護者等の見込み数は1,200人であるが、市政だよりでも広報をし1,200人から1,500人規模で開催したいと考えている。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(羽賀委員) すごくいい形で県に広がっていったが、熱中！感動！夢づくりの事業だということがわかりにくい。PRのチャンスと捉え、メディアに取り上げてもらうなどしてはどうか。

(竹内学校教育課長) 「県立専門高校メッセ」は毎年上・中・下越で順次開催しており、今年はアオーレ長岡で開催するものである。PRの工夫を考えていきたい。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に、平成26年度ポニー事業について、事務局の説明を求める。

(波多子ども家庭課長) ポニー事業は熱中！感動！夢づくり教育の一環として毎年行っているものである。今年度は7月28日より3泊4日の「ポニーとキャンプin蓼科」を皮切りにスタートする。目的については、青少年の健全育成と子どもたちの達成感を図るとともに、大人を含めた参加者同士の交流とボランティアを育成する場を提供するものである。また、今後のポニースクールのあり方について、この期間だけではなく常設のポニースクールがあると良いという市民の声があったため、これまでも検討していたが今年度の事業を検証しながら検討を続けたい。グラウンドポニースクールについて、昨年度は11日間の開催であったが、今年度は14日間に延長した。開催学校も13校から15校に増え、加えて4つの施設で実施し、その際に近隣の保育園児などからも参加していただく予定である。9月16日の長岡聾学校開催について、長岡聾学校は県立校であるが、この事業が障害のあるなしに関わらず、子どもたちにポニーとのふれあいや乗馬体験の場を提供するという目的のもと、福祉的な視点から声がけをした。平成23年度に続いて2回目の開催である。千手小学校については、学校では土日開催が難しい中、学習参観に併せて土曜日に開催する。平日の参観では祖父母の参加が多いが、土曜日開催にすることで父母の参加が多数見込まれるため土曜日開催の申し出があったものである。支所地域の巡回ポニーカーニバルについては昨年度試行的に始めた事業で、大変好評だったため、今年度から改めて2か所ずつ行うものである。小国地域については昨年度も実施し、好評だったため今年度も実施したいと申し出があり、コミセンや地域住民が主体となってコミセン祭りに併せて実施するものである。中之島地域につ

いてもコミセン祭りに併せての開催である。長岡地域のポニーカーニバルは昨年度に引き続き、悠久山公園での開催である。「ポニーとキャンプ in 蓼科」については28,000円の自己負担となるが、42人定員のところ118名から応募があり、抽選により決定したものである。運営方法としては昨年度に引き続き実行委員会による事業運営で、運營業務に関しては(公財)ハーモニセンターへ委託するものである。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(羽賀委員) 右肩上がりに伸びておりとても良いと思うが、効果としてどういった評価を受けているのか伺いたい。

(波多子ども家庭課長) 千手小学校の校長先生からは、子どもたちの感動した姿や、ポニーを怖がる生徒を教師が抱きしめるといった教師と生徒のふれあいなど、日常では見られない場面を見ることができたというお話をいただいている。総合支援学校でも自分のでき得る範囲で喜びを表現する姿が見られ、保護者・先生方に喜んでいただいている。自分も乗馬してみたが達成感や喜びを感じたので、子どもたちも同様に感じていると思われる。

(佐藤教育部長) 昨年、波多子ども家庭課長と蓼科で行われたキャンプ事業に参加してきた。うさぎや山羊などの小動物には学校等で触れ合う機会があるが、馬は自分でコントロールできない大動物であり、古代から人間と心の交流ができる動物といわれている。特にお年寄りや障害者の方のために馬を活用したアニマルセラピーが行われている。馬は人間の心を読む動物と言われており、大動物と子どもたちがふれあうと心が通じる点に着目し導入したものである。馬と人間の間には長い歴史があり、うさぎなどの小動物とは違う意味でのふれあいができる良い動物である。

(羽賀委員) ペットとパートナーの違いだと思っている。なかなかこういった体験はできないので、これが右肩上がりなのは素晴らしいことである。実施数が伸びていることだけではなく、質や効果の面もアピールしてほしい。

(加藤教育長) バーチャルな世界に生きる子どもたちにとって、この実体験は大きな意味があるのだろう。事業の立ち上げ時からの流れや伏線、良かったこと辛かったことを踏まえて事業を担当しないと実施するだけに終わってしまう。本来の目的を忘れるとただのイベントで終わってしまい、手段を目的化してしまう。希望した

学校に訪問しているとのことだが、それらの学校は毎年継続開催しているのか。

(波多子ども家庭課長) ここ数年で訪問している学校はほぼ毎年開催しているが、全く開催したことのない学校もまだある。以前担当していた先生が転任したことにより、開催が途切れてしまう場合もある。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(羽賀委員) この様子を撮影したDVDはあるのか。

(佐藤教育部長) NCTに委託し編集してもらったものがある。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(青柳委員) あとどのくらい開催校が増えても対応できるのか。

(若月子育て支援部長) 予算的にこれ以上は対応は難しいが、常設化したいと考えているので今後検討していきたい。

(中村委員) ポニーキャンプに参加する42名は学年などを考慮して抽選を行ったのか。また中学生の応募はどのくらいあったのか。

(波多子ども家庭課長) 学年などは考慮せず、無作為に抽選を行った。資料がないので明確に答えられないが、中学生の応募は5名くらいである。

(羽賀委員) 参加費が自己負担でもこれだけの応募があるので、予算がなくなったとしても継続でき得る事業であり、今後熱中！感動！夢づくり事業の柱になっていくと思う。入口戦略や出口戦略を設定すると良いと思う。

(若月子育て支援部長) ポニーキャンプには高校生ボランティアに協力してもらっている。中には中学生のときに参加し、また行きたいと志願した生徒もいる。ボランティア参加も19,000円の自己負担となるがそれでも参加したい生徒が多数いる。高校生ボランティア講座を子ども家庭課で開講しているが、この事業が応募増加につながっている。ポニー事業によって小学校から高校までのつながりができている。

(羽賀委員) 東山ファミリーランドにいるポニーはこの事業に利用できないのか。

(若月子育て支援部長) 非常に特殊な教育をしなくてはならないので、この事業では利用できない。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に、平成26年度長岡市青少年健全育

成総合対策実施計画について、事務局の説明を求める。

(波多子ども家庭課長) 昨年度までは青少年問題協議会で諮っていたが、今年度からは子ども子育て会議の中で諮り、承認を受けたものである。内容については例年どおりで、冊子には長岡市で行う事業と計画について記載してある。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に、附属機関会議報告について、事務局の説明を求める。

(小熊科学博物館長) 平成 26 年度第 1 回長岡市水族博物館協議会について報告する。平成 26 年 7 月 11 日に長岡市寺泊文化センター(はまなす)にて開催した。出席者は定員 10 名のところ 9 名で、この委員は漁業や商工会、地元の関係者、学校教員、一般公募により選出されている。他に、佐藤教育部長、関根寺泊支所長と大河津分水の大規模整備や港湾計画についても協議するため政策企画課担当者にもご出席いただいた。内容については任期の切り替わりに伴い、正・副委員長を互選し、平成 26 年度事業実施計画・状況についてと水族博物館整備事業の計画等について説明し、ご意見をいただいた。平成 26 年度は現在の水族博物館を設備的に延命させるために、大規模な改修工事を予定している。委員から、「熱中！感動！夢づくり教育推進事業をはじめとする活動事業の効果や評価はどうか。」とご意見をいただいた。これに対し、水族館に来館いただく事業を行い毎年好評を得ており、来館者数も増え効果を上げていると回答した。また、水族館に関心のある委員があり、「子ども向けの活動だけでなく大人向けの企画も考えてはどうか。」とご意見をいただいた。「熱中！感動！夢づくり教育推進事業の一環として取り組んでいる職場体験の受け入れ」については、寺泊水族館は長岡市中心部から離れているが各地域から希望があれば受け入れをしていると回答した。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(波多子ども家庭課長) 続いて、平成 26 年第 1 回長岡市子ども・子育て会議について報告する。平成 26 年 7 月 15 日にさいわいプラザ 6 階大会議室を会場に開催した。出席者は計 47 名である。会議内容について、委員長・副委員長の選出をし、委員長には教育委員会の指名で長岡市主任児童委員会の会長である高野礼子さん、

副委員長には委員長の指名で長岡市母子保健推進協議会の会長である児玉ゆうこさんを選出した。長岡市子ども・子育て支援事業計画（仮称）の策定については、新しい法律に基づいた新計画を作成するために、現在の子育て応援プランの評価をしようとして資料を使い説明した。「育つよこび 育てる幸せ 子育てを応援するまち 長岡」を基本理念に、5つの基本目標を掲げて取り組んできた。それぞれの基本目標の中で主な効果が出た事業について写真などを入れて説明した。「親と子が共に学び育つことへの応援」では、中学生を対象にした子育ての駅における次代の親育成事業などについて説明した。「子育てをしている全ての家庭への応援」については、子育ての駅の運営等について説明した。「子育てと仕事との調和のとれた生活への応援」については、市長部局・商工部・男女協同参画で進めている「ワーク・ライフ・バランス」の啓発等について説明した。「子どもが健やかに育つ安心・安全なまちづくりへの応援」については、子どもたちの安全のために防犯灯の設置や通学路セーフティリーダーの育成活動について報告した。「市民力・地域力で支えあう子育てへの応援」については、ままのまカフェをはじめ、日本一活動していると言われる母子保健推進委員の活動について紹介した。まとめとして、現プランに掲げている事業については全体の約9割において目標が達成されているが、「ワーク・ライフ・バランス」などの意識啓発活動については父親の育児休業取得率などが依然として低く、男女共に育児ができる環境が求められている。また、相談の場を整備しているが、悩みに寄り添う支援がもっと必要ではないかといった課題について提起した。その他に今回の事業を策定するために行ったニーズ調査の概要、会議のスケジュール、条例を策定するといったことを事務局から説明した。また、青少年健全育成総合対策実施計画について承認をいただいた。10年の評価として、東京家政大学短期大学部の准教授である平野順子さんをアドバイザーとして迎え、長岡市は市民の意見を聞きながら様々な政策を展開してきたと評価をいただいた。「関係課が非常に多く、委員よりも事務局の数が上回っていた。教育委員会、市長部局あわせて計画に取り組んでくれた。グループディスカッション時も委員の皆さんと市の職員が入って交流を進めており、その結果政策が花開いていったのではないか。」と評価いただいた。委員の皆さんからもアドバイザーと同様な評価をいただいた。県外出身の公募委員の方がおり、長岡市で出産・子育てやアレルギーを持

つ子どもたちのための会を立ち上げて活動しているが、「子育てしやすく、子育て支援のサークルを立ち上げる際のフォローも大変良い。」と評価いただいた。次に、ニーズ調査の結果やこれまでの評価、子育ての駅で実施した「子育てしやすいですか」といった内容のアンケート結果などを披露し、子育てしやすい街であることをPRしたが、実は不満や不安があるがなかなか言えずに抱えこんでしまった方もおり、そういったところにも配慮してもらいたいという意見がでた。長岡市では「保育園待機児童はゼロ」と言っているが、実際はそうではないのではないかと。希望する保育園には入園できずに、働くことができない母親がいることは課題であるといった意見や、子育ての駅などのハード面は整ってきているが、ソフト面である子育て中の人々の声を取り入れた施策を展開してほしい。未熟児を育てた経験上、子育ての駅などへ出かけた際に相談はしないが、実は相談を必要としている人がいるのではないかとご意見をいただいた。これに対してはその場での回答はしなかった。子ども子育て会議は残り3回であるが、それだけではなかなか議論が深まらないということで、4つの部会ワーキングを用意する。働きながらの子育てをどうするべきかといった、「ワーク・ライフ・バランス」を考える部会、0歳1歳の入園について考える部会、小学校への進学時に児童クラブに行く際の壁や、その後の課題などについて話し合う部会、保育園等に設置してある支援センターで保護者サポートについて話し合う部会の計4つの部会を立ち上げた。関係者を含め委員の皆さんからも募集したところ、1人で2つの部会に加入したいという声もあった。報酬もなく申し訳ないが、関係企業の方や児童館の厚生員、学校の先生、保育園などにも声がけし、各部会20人程度集まったので、それぞれ2回から3回に渡り議論を深め、子ども子育て会議とあわせ年度中に計画を策定したいと考えている。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(羽賀委員) 緊急時のSOS電話のようなものは設けているのか。

(波多子ども家庭課長) 子ども家庭センターで、「育児が辛い」などといった相談を受けている。子ども家庭課の保健師や子育ての駅の保育士も相談を受けているが、土日・夜間は児童相談所が受け付けている。

(羽賀委員) 外出できない、駅にも行けない、そういう人が煮詰まると危ないのではないかと。救済の方法は何かあるのか。

(波多子ども家庭課長) 「子どもを叩いてしまった、どうしよう」といった電話や「もう死にたい」などの電話をいただくこともあるので慎重に対応策を検討していきたい。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(加藤教育長) 子育ての駅や保育園に「相談してください」など、子育ての悩みについて相談を受け付けていることを掲示してあるのか。

(若月子育て支援部長) 母子保健推進員が「こんにちは赤ちゃん訪問」で訪問する際、「こういう時はここへ電話しなさい」など伝えている。

(中村委員) 子育て中や妊娠7か月の時にすこやか妊婦さん訪問、生後4か月にはこんにちは赤ちゃん訪問を行っている。訪問依頼書が子ども家庭課から届き、それをもとに各家庭を訪問し、虐待している家はないかなど様子を見ながらお話を聞いている。橋渡しの役割しかできないが、「困ったことは何でもお話ください。」と声がけしている。地域のサークルを紹介し、母子保健推進員が関わるイベントなどなるべく行きやすいところからお誘いしている。

(加藤教育長) こんにちは赤ちゃん訪問は、生後1か月ではなく4か月が対象なのか。

(若月子育て支援部長) 生後1か月の訪問は子ども家庭課が行い、生後4か月の訪問は母子保健推進員が行う二重構造となっている。色々な人が関わることで、問題点の早期発見に繋がると考えている。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(加藤教育長) 県の「ハッピー・パートナー企業登録制度」に登録する市内企業が6社から69社と11倍に増加したとあるが、父親の育児休暇取得率は依然として低いままである。登録するだけでいいと考える企業もあるのではないか、登録時の条件などはあるのか。

(波多子ども家庭課長) 登録企業数を増やしたいこともあり、特に条件は設けていない。これから取り組む意思があればどの企業でも実績に関わらず登録できる。

(若月子育て支援部長) アオーレでハッピー・パートナー企業の展示会を商業振興課が開催し、企業のイメージアップにつなげるよう実施している。商工部としても政策をうっていききたいとタイアップして取り組んでいる。



(加藤教育長) 市民がわかりやすいように、長岡市で一番父親の育児休業を取得しやすい、あるいは取得している企業ランキングをアオーレのオーロラビジョンに映すなどしてはどうか。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に催し案内に入る。

(小熊科学博物館長) 長岡藩主牧野家史料館開館記念特別展について紹介する。アオーレ長岡で開催していた「長岡藩主牧野家の至宝展」を科学博物館に場所を移し開催するものである。今回のテーマは「11代藩主牧野忠恭とその時代」で、幕末時代の長岡藩主として徳川幕府の老中も務めた牧野忠恭についてである。明治時代にかかる頃であったため写真資料が多数残されており、それらを中心に展示・紹介する。開館記念鼎談として、7月26日に徳川宗家第18代当主である徳川恒孝様をお迎えし、徳川家と牧野家の関わりと肖像写真をもとに、東京大学大学院情報学環特任研究員の方及び牧野名誉館長と鼎談をしていただく予定である。もう一つは、長岡市馬高縄文館で開催される特別展「南三十稲場式土器をさぐる」である。縄文後期の土器で、馬高遺跡は5000年前、三十稲場遺跡は4000年前のものである。その南側で発見された土器を南三十稲場式土器と呼び、火焰土器ほど派手ではないが三十稲場遺跡の特徴的な土器を紹介させていただくものである。

(大橋委員長) 他に報告事項はないか。

(栗林保育課長) 長岡市富曽亀保育園の実践発表が全国の保育研究大会に選出されたことについて報告する。この大会は、5月に県大会が開催され18園参加のうち2園が関東ブロック大会に進む。関東ブロック大会は7月に山梨で開催され、東京都、関東10県、政令市4市合わせて15都市の代表30園のうち6園が全国大会に進む。その全国大会に市立富曽亀保育園が参加するものである。発表の内容は、「保育の社会化に向けて、保育の営みをいかに社会に発信するか 地域とのより良いつながりを目指して」と題し、富曽亀保育園は平成14年度からエコ活動に取り組んでおり、園内に留まらず地域・保護者に積極的に発信をしている。この取組が深まり子どもたちの大変豊かな体験につながっている。それにより保育園・保護者・地域が一体となって子どもたちを見守り育てているという素晴らしい発表になって

いる。この活動はお金がかからず、職員が工夫をして、古紙回収や地域のゴミ拾い、エコ百俵集めなど様々な活動を行い、そこで生まれた収益金を活用して地域に還元している。保育士が工夫をして子どもたちのやる気を引き出し、地域を巻き込んでの素晴らしい取組が評価されたと大変嬉しく思っている。自信と誇りを持ち、長岡市の代表として全国に発信してほしいと期待している。保育課としては保育園・保育士の負担にならないようバックアップしながら、こういった活動が長岡全市に広がっていくよう広報活動を含めて周知を図りたい。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(大橋委員長) この大会には毎年参加しているのか。また、今まで長岡市から全国大会に進んだ事例はないのか。

(栗林保育課長) 大会には毎年参加しており、大会自体は50回以上開催されている。関東ブロック大会に進むことはあったが、全国大会には今回初めて参加する。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか

(加藤教育長) 庁内メールで発信してはどうか。

(栗林保育課長) 広報したいと思う。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。他に報告事項はあるか。これをもって協議報告事項を終了する。

---

(大橋委員長) 本日は、定例会の前に宮本小学校、大積小学校を訪問した。委員の皆さんの意見、感想はいかがか。

(中村委員) 宮本小学校を訪問し、1年生の国語の授業を見学した。夏休み前に読書活動へつなげるために、先生が読み聞かせを行っていた。先生の読み聞かせが上手く、子どもたちがしっかりと聞いていた。続いて6年生まで順に見学していくと、6年生の廊下に読書感想文が掲示してあった。一つの本に関して皆が色々な形で感想を寄せていた。校長先生の話では、強制で読ませているのではなく、読んでもらいたい本を青葉台中学校単位で「読んでもらいたいおすすめの本100選」のパンフ

レットを作成し、その中からいくつか紹介し、さらにその中から子どもたちが選んでいるものである。子どもたちは本が好きなようで、たくさん読んでいることに感心した。授業は映像教材を用いて、算数の図形問題に取り組んでいたが子どもたちの元気がないように感じられた。授業中に先生から指されるとしっかり答えていたが、自分から元気よく発言する子が少なかった。子どもたちが文章に表したものが掲示してあったが、文章の表現力に課題を感じた。地域全体で育成するということで、雪国植物園の活動を通して地域の方と交流し、発表する場を設けている。なかなか思うようにいかない現状がある。まもなく長岡花火大会だが、毎年民謡流しに参加されており、学校単位で参加するところが多いが、この地区はコミセンが主体となって参加しており、6年生の児童と保護者総勢 50 人くらいで参加している。良い活動だと思った。

(羽賀委員) 今回の懇談会のテーマが「地域全体で子どもたちの社会性を育成する」であったが、ハートフル活動の推進ということで、地域連携がとれている学校だと思った。顔が見える関係で進み、地域行事そのものに校長先生教頭先生が自ら積極的に参加されるということが、子供の自然参加を促している。1人2鉢活動というお家を訪ねて手紙を渡し花の苗をプレゼントする活動を、お年寄りが楽しみにしている。活動を通して人間が穏やかに育っているのだと思った。昨年 140 周年を迎え、記念式典の二次会には父兄が 50 人も参加されるほど、地域と学校に密接な関係がある。言語についても一生懸命で、増やしたい言葉、減らしたい言葉を対比形式で壁に掲げそれぞれを子どもたちに書かせているのだが、これは効果があると思う。研究課題として、言語活動に取り組んでいる。自分から積極的に進めなくても、守られて理解してもらえぬ地域にいるため、子どもたちが積極的にならないのが大きな課題である。自主的に考え話すことに抵抗感があるということは、大きな課題のように感じたが、地域全体で育てられているのはすごく大きな安心につながっていると思う。また小中の連携がうまくいっており、中学のリーダーには宮本小の卒業生が多いというのは地域事業に参加していることで育成された社会性がリーダーシップをとっているからではないかと感じた。

(青柳委員) 大積小学校を訪問した。少人数小規模校のため固定化した人間関係による、自分の考えや思いを素直に表現できない面が見受けられると事前に書面でい

ただいた。それを念頭におき参加したが、受けた印象は全く逆であった。3世代同居の家庭が多く、安定した家庭生活を送っていることが少人数学級の穴埋めとなっている。大積あめや踊りや神楽などが伝統的に地域で传承されており、地域の方から教えていただいている。県の天然記念物に指定されている白ツツジの活動を通して、今まで学校的には児童の参加について受け身であったが、今年度から自ら参加していく心構えを育てていくことに力を入れている。その成果が出ていると感じた。子どもたちは大変活発であった。3・4年生、5・6年生がそれぞれ複式学級で机の配置パターンを工夫していた。L字型にするなど、背中合わせにならないよう児童が集中できる環境を先生が考えていて、複式なのにこれほど集中して勉強している授業を初めて見た。一つ残念だったのが、どこの教室に行っても防災に関する危機管理が希薄だったことである。つい先日、大雨洪水による避難指示等が出たばかりなので、注意喚起した。一番感動したのは、給食時に一緒に食事をした4年生の子どもたちが、質問したことに対して単に回答するだけでなくそこから話を発展させることができることであった。

(大橋委員長) 大積小学校を訪問した。変えなければいけないと感じた点がある。大積地域は宮本地域と同様に、地域が非常に熱心である。連合町内会でも宮本・大積・青葉台は一緒に取り組んでおり、地域が育っている。それを前提に学校はどうあるべきかということを考えさせられた。まず、全校児童が37名であること。3年生は3人、2年生は5人で、多くても8~9人である。3・4年生、5・6年生が複式学級ではあるが、国語や算数の授業では学年ごとにそれぞれの教科書を用いて全く別の内容に取り組んでいた。そういう面で複式学級とは言い難かった。AB年度といって年度ごとに学習の中心となる学年を調整しながら取り組む体制をとっている科目は、理科、社会科、体育、音楽、図工であると担任に聞いた。2つの学年を教えているので形式的には複式学級だが、国語と算数においては複式学級ではない。全ての準備を終えても授業数が足りず、これでは先生方が難儀してしまう。その中から選定してどのように授業を構成していくかが一番の肝所なのである。今日は5・6年では体積の問題を、3・4年では辞書を調べていた。中身は重なっているように思えるが、全く別々のことに取り組んでいた。長岡市全体では複式学級はどうなっているのか、指導すべきところは指導しながら、難儀している先生方が

いるので気を付けてやってもらいたい。子どもたちはよく育っていると思う。協議事項で重なる点は大積も宮本も社会性を育てるという点である。中学校と小学校の5年生、宮本と大積が一緒になって、高柳で2泊3日の合宿を継続的に行っているが、これが大変良い形で成果を収めている。校長先生は喜んでおり、今後も継続していききたいと話していた。学校が地域におんぶされている、学校独自に地域を受け入れながら、教育課程の中に位置づけて仕事をしていないのではないかと非常に強く感じた。校長先生は今年初めて白ツツジを育てる会を、子どもたち全員が参加しながら授業の中に取り組み始めた。これからの課題はその地域に貢献できるような、地域を大事にする子どもをどうやって育てていくかという課題を持っていると聞いた。今後は学校がもっと積極的に授業の中に地域とのつながりを取り入れる事が必要なのではないかと思った。

(中村委員) 宮本地区では、花いっぱい活動を通して思いやりの心や豊かな心を育てようと、地域のお年寄りへ苗をプレゼントしている。

(大橋委員長) 学校独自にはどのように育てているのか。学校では何の時間にそれに取り組んでいるのか。

(中村委員) 花いっぱい活動を学校ではどの時間に取り組み、地域の方がどのように関わっているのかまでは話をきけなかった。

(羽賀委員) はっきりしているのは雪国植物園の取り組みで、学内に入った事業としてやっていることである。ただそれをそれほど増やせるのかという問題がある。

(大橋委員長) 大積あめや踊りには、踊り、振り付け、音楽、歴史や伝統もあるというが、それは教えてもらうばかりで、学校からの働きかけで指導者を呼び、5・6年生あるいは3・4年を含め一丸となってやろうといったことがなく、夜の8時から9時ころまで親御さんが同行した上で、学び披露している段階である。その地域の文化財を大事にしていきたいということではあるが、うまくつながらないものかと思う。

(羽賀委員) そこは難しい話題である。いくつか我々が聞いたものも事業として入っているかもしれないが、事業の中にそういったことを入れてしまうと、教員の負担も大きくなり、社会教育という面の位置づけとはまた別の位置づけになる。学校教育と社会教育はまず別れていなければいけない。そこがどうつながるかというテ

ーマで取り入れていくのはいいと思う。あまりそれをメインの柱にしては地域住民も大変なのではないか。

(青柳委員) もったいないと思った。地域の人たちはむしろもっと伝承してもよいと思っているのではないかと感じた。

(羽賀委員) 一番大事なのは地域ではなく子どもたちだと思う。子供がどう思っているか、それを育成するために先生方がいる。地域との関わりが嫌で出ていく若い人も多いので、その課題もよく考えなくてはならない。

(大橋委員長) 校長先生の話では、子どもは喜んでいるということである。子どもが成長してきたのはそのおかげもあると。

(青柳委員) 一緒に給食を食べていた女の子に習い事を聞いたら、「あめや踊りを習っている」という答え方をしたので、自分から好んで取り組んでいる子もいるのだと思った。大人になった時に自分が外に出て行って、昔、地域の伝承を習った経験から、地域を思う心や当時教えてくれた人との関わりを思い出すことが大事なのではないかと思った。市歌を手話で歌う目的も同様に、そういったことをこの地域では伝承できるのだと思う。

(羽賀委員) この小学校地域では若い人が地域事業が多すぎて逃げていることが懸念される。「参加しても良い」ではなく、「参加しなければいけない」になると、煩わしいと思ってしまうのではないか。他にもそういった地域が多く見られる。はたしてそういう時代であるのか。市民協働センターで若い人が地域を嫌う理由の一番である。

(中村委員) 苗字で誰々ですといっても屋号で言わないと通じなかつたりする。そういう地域性が根強く残っている。

(大橋委員長) 地域によって雰囲気はかなり違うようだ。それはわからなかった。大積地域ではあまり感じられなかった。ただ子どもがあまりにも少ないことに驚いた。あれでは授業が成立しないのではないか。

(羽賀委員) 地域の方もその事について心配されていた。子どもを大切に思っていること、地域に感謝していることは如実であるが、その中での個人の価値観というものはどうか。

(大橋委員長) 問題提起としては、校長先生が白ツツジの存在を知らず、今までは

全く取り組まずに今年度から新たに取り組み始めた。あめや踊りについても、教えてもらっているものを運動会と文化祭で披露している。でもそれは習っている生徒だけがやっている。その関係の会長さんは機会があれば教えとおっしゃっていた。それでいながら学校の掲示物は、賞に図画に作文などが驚くほど掲示してある。地域の課題として、「子どもたちのコミュニケーション能力を高め、社会性を育て地域を自慢できるような、あるいは地域に貢献できる子どもを育てたい」と、おっしゃっていた。子どもたちに「自慢できること」を聞いたら、挨拶の良さを誇りにしているし、あめや踊りも習っている、と答えていた。挨拶が良く仲が良いのが特徴だとも答えていた。学校は地域性とおっしゃったけど、地域は一生懸命だし、子どもなりにあの数でも、精一杯すぎるほどに精一杯やっていると思った。

(青柳委員) 書いてあることとは違う印象を受けたが、良い方に違っていたので良かった。

(大橋委員長) 羽賀委員が述べたように、社会教育と学校教育は一緒にしてはいけない。子どもを最優先にしなくてはならない。あまり社会の問題を持ち込まないようにしたいが、社会に生きる子どもを育てたいのであれば学校独自のカリキュラムを検討してはどうか。学校の課題に答える形にならないかと校長先生に意見したところ、検討してみるとお答えいただいた。複式をやっても5年生は5年生、6年生は6年生で授業を進めているので、授業日数をどのように確保していくのか。授業日数が足りないように思うし、統合せず全く別のことをしているので、片方が自習、もう片方はどんどん授業を進めていく。理科や社会は見学していないのでわからないが、複式がどうなっているのかと感じた。

(武樋教育総務課長) 複式学級について説明させていただきたい。学務課で学校の規模適正を担当していた時に、小規模校の実態を調べた。国語や算数といった基礎学力においては複数の学年があったとしても、それぞれの学年にあった段階的な学びをやるために授業を別々に行っている。他の先生がそれぞれの学年に入って、本来であれば担任は一人だが、それぞれの学年にあった授業を行っている。理科や社会の場合は、学年に応じた段階というものがそれほど関係ない。例えば3・4年生でいえば、今年度は3年生向けの授業に3・4年生全員で取り組む、次年度は4年生向けの授業に取り組む、これをA B年度方式という。2年間でその2学年の学習

を終わらせるやり方である。基礎学力的な国語算数であれば、漢字一つをとってみても、学年に応じてその年に学ぶ漢字があるので、A B年度方式では学びが継続しないということである。

(羽賀委員) 学校は本音を言っていないと思う。あまり地域が口出ししすぎるとコントロールできなくなるので、抑えている部分もあるのではないかと。さじ加減が難しい。

(大橋委員長) 廊下の掲示物を見る限りではとても素晴らしく、すごい取り組みをしている。今回投げかけられた話題が「社会性の育成はどうあるべきか、地域貢献できる子ども育てたい、あめや踊りを大事にしていきたい、白ツツジを大事にしていきたい、地域の人を大事にしていきたい」ばかりで、奇異に感じた。

(大橋委員長) 宮本地域の子どもたちは元気が良かったのか。

(羽賀委員) そういった印象はあまり受けなかった。

(青柳委員) 大積地域の子どもたち、特に1・2年生は活発で積極的に発言していた。

(羽賀委員) 授業には静かに落ち着いて臨んでいたが、元気がない印象を受けた。

(中村委員) 読み聞かせの授業だったこともあり、本に集中していた。

(大橋委員長) ちょうど昨年に宮本が140周年を迎え、今年は大積が140周年を迎える。高柳にある子ども王国、通称じょんのび村での2泊3日の合宿は、大変評判がよく、社会性が存分に育成されていると思う。小中学生の仲の良さも評判がよく、中学校に進学してからの話とニュアンスが違うようである。社会性を育てることに力点を置いているので、地域の方も評議委員の方ではなくて、その保存会の会長さんと呼んでいるから、地域保護者の会長さんとあめや踊りや神楽保存会の会長さんらの話では子どもたちが一生懸命やってくれており、白ツツジの会も同様に取り組んでくれて非常に嬉しいとお話していた。

(中村委員) 宮本小学校区域の人の反応はとても良いものであった。

(大橋委員長) 地域が前に出すぎて、学校が埋没してはいけないし、学校も本音を語りながら地域の情報を発信しなければいけない。地域のものを取り入れることも大事である。その中で埋もれないように学校は学校で取り組まなければいけない。

(中村委員) 地域で伝承されるものが根強くあるので、そこに学校を巻き込んでい



きたいという地域の考えがあるように感じた。そこに先生たちも巻き込まれている印象を受けた。

(羽賀委員) ユネスコのプロジェクトでベトナムに行っている教員もいる。少数民族を訪れ、国際理解を図る目的である。自分の地域の愛情を他の地域と比較して、当たり前ではないことに気がつき、比較しながら自分たちの地域が見えるようにする方が大事だと思う。地域に埋没し過ぎてしまい、地域万歳というのは教育ではない。

(中村委員) 青葉台中学校進学時に、すごく活躍している生徒が多いと聞いたので、小学校時代における地域との関わり方が、その年齢に応じてあるのではないかと考えた。

(羽賀委員) ボランティアにしても、学校の中では強制力がある。学校外では自分の意思によるものであり、そこに社会性があるのではないかとと思う。

(中村委員) 中学校進学時にそれが活かされるのではないかと。今すぐに社会性が発揮されるわけではなく、長い目を見たときに備わっていればよいのではないかと。

(加藤教育長) 複式学級については、武樋教育総務課長が説明したとおりである。今年度は市内に 11 校ある。各学校の実態に応じた取組ややり方をしていると思うが、その実態把握をしたいと思った。学校からもヒアリングを行い、それが子どものためになっているのか、教師の負担になっていないかについて調べ、報告したいと思う。大積・宮本ともに社会性の育成を目標に掲げている。青葉台中学校区の小中連携は先駆けて行った事業である。その一環として夏休みの 8 月中旬にじょんのび村で、小学校 5・6 年生と中学 1 年生が 3 泊 4 日で合宿を行う。こういった活動を通して社会性を育成することを謳っていると思うが、その単語に振り回されている感じがする。そもそも社会性は、ある一定の集団の中で身につけられるものであり、複式学級の中では限界がある。宮本地域は伝統・歴史があり、いまだ屋号で呼ぶといった地域関係がある中で子どもたちを育てている。周りがしっかり支えてくれているので、ここで働く先生方は幸せだと思う。落ち着いた授業力があると思ったが、講師の先生を除くと教員の平均年齢が 50 歳近く、この職員構成は珍しい。ある程度一定の規模で子どもたちが学び合う、教え合うような環境の中での学習、また、集団の中で人間的な経験を積むことが社会性の第一歩であると思うのでし

かりしなければいけない。複式を含めて社会性の育成など私どもで受け止めて、学校に無理がないよう指導していかなければならない。

---

(大橋委員長) これをもって本日の定例会を終了する。

---



会議の次第を記載し、その相違ないことを証するために署名する。

長岡市教育委員会委員長

長岡市教育委員会委員

長岡市教育委員会委員